

## ウクライナ問題の解決の鍵は奈辺に？

為政者の状況判断と意思決定がうまくつながらない話が「筋の通らないデタラメ」となるのでしょうか、ロシアのプーチン大統領がウクライナ侵攻を決めた時には、おおよその人々がその状況判断も意思決定も確かめることなく一斉にプーチン大統領を「デタラメな独裁者」呼ばわりし過ぎていたように私には思えます。少なくともプーチン大統領は「ウクライナが NATO(北大西洋条約機構)に加盟すれば、ロシアは死命を制せられることになる」という状況判断に基づいて、「ウクライナの軍事施設を破壊して軍事力をゼロ化する」という意思決定を行なっていることが確かです。NATO(北大西洋条約機構)は、“ソ連を中心とする共産圏(東側諸国)に対抗するために”西側陣営が結んだ多国間“軍事同盟”なんですよ。ソ連崩壊後、東欧諸国をはじめ旧ソ連圏の各国も NATO 入りを果たしましたが、仮想敵国あつての軍事同盟ですから、ソ連に代わってロシアが仮想敵国となっている筈です。ウクライナは東ヨーロッパの中央部分に位置し、ロシアを除けば面積ではヨーロッパの中で最も大きな国家です。しかも、ロシアと欧州各国との間の要路となるので、ロシアにとってウクライナは戦略的・軍事的な面から見て非常に重要な地域と言えます。地図を見ても、少なくとも軍事的に中立であったウクライナが反ロシア陣営に加わるのですからロシアにとっては一大事になるということがよく分かります。



ウクライナの事態は、日米安全保障条約という軍事同盟を結んでいる日本が、ロシアと軍事同盟を結びアメリカに対して刃を向けるようになるのと同じことです。そういう事態を迎えたとしたら、プーチン大統領がウクライナ侵攻を決意したのと同じようにアメリカのバイデン大統領は日本侵攻を決意することでしょう。要するに誰がロシアの大統領になったとしても同様な状況判断と意思決定に逢着するものだと思います。しかし、プーチン大統領は軍事には疎い人なのかな、それとも、軍部を掌握するだけの力量がないのでしょうか、事態はプーチン大統領の意思決定の「ウクライナの軍事施設の破壊」と大きく違う方向に展開しています。市街地の住宅や学校、病院までずたずたに砲撃され、罪のないウクライナ国民が恐怖におびえているのですから目を覆いたくなるばかりです。

2003 年にアメリカのジョージ・ブッシュ大統領が、イラクに対する武力使用の意思決定をした時は「イラクが大量破壊兵器を保有している」という誤った状況判断によるものでした。ここでもアメリカ軍が、これでもかこれでもかと言わんばかりに大量の爆弾を降り落として、住宅や学校、病院などを破壊し、大量破壊兵器の保有の有無と全くかわりのない無慮 8 万人超のイラク国民の命を奪うという悲惨な光景が展開しました。状況判断がデタラメなら、

世界最大の大量破壊兵器保有国のアメリカがなけなしの大量破壊兵器保有国イラクに対して武力を用いるという意思決定もデタラメで、「筋の通らないデタラメ」そのものでした。しかし、ブッシュ大統領が「デタラメな独裁者」呼ばわりをされなかったのは何故でしょうか。「アメリカこそ正義であって世界の平和はアメリカによって守られている」という“思い込み”がいつの間にか世界の人々の間にまかり通っているようになっていないからなのでしょうか。

私たちが学生時代に日米安保条約締結反対に立ち上がったのは当時の学生の「不戦を謳った平和憲法に違反する道につながる」という状況判断に基づくものでした。ところが日本の為政者たちの状況判断は全く曖昧で、爾来もっぱら、「日本はアメリカに守られている」という“思い込み”に則って政局運営されてきただけのことでした。アメリカがイラクに対して武力行使した「筋の通らないデタラメ」に対しても、時の小泉純一郎首相は世界に先駆けて真っ先に支持の意を表明していましたね。更にはこの“思い込み”の延長で「日本はアメリカの核の傘に守られている」という論旨がまかり通って日本は、世界で唯一の核兵器被爆国として果たすべき核兵器廃絶促進の努力を怠っているのですから、まさに「恐るべしすりこまれた思い込み」と言ったところですよ。「筋の通らないデタラメ」を“独裁”によるものと見がちですが、“神話にも似た思い込み”によるところが結構大きいのだということを理解しておく必要があると思います。かつて日本が第二次世界大戦にのめり込んでいったのも、大政翼賛会の独裁権力によるものと見る説がありますが、実際には「この戦争は鬼畜米英に対する聖戦なり」という“思い込み”がすりこまれており、そのために「お国にためなら」と戦場に臨み「天皇陛下万歳」の声を残して命を落とした日本兵が数多くいたのですから。

いずれにしても武力行使は絶対に避けなければなりませんね。いったん軍部の出番となると、為政者による状況判断も意思決定もそっちのけにされ、「我が国は正義なり。不正義なる敵を打ち破ることが正義の証なり。」という“思い込み”が跳梁するところとなってしまふからです。恐らく、プーチン大統領も、進軍の行方を止めることができず行き着くところ、つまり、ウクライナ軍を完膚なきまでにまで打ち叩きウクライナに傀儡政権を打ち立てるところまで行かなければならなくなってしまうことでしょう。この間に何の罪もないウクライナ国民が命や安住の地を失ったりすることは耐え難いことですが、同時に国際的に孤立し交易関係も失ったロシアでも、罪のない国民が厳しい言論統制を受けるだけでなく、貧しい生活を強いられることも気になるところです。日本も含めて諸外国は相次いで制裁策を打ち出していますが、制裁策のために困窮するのは罪のないロシア国民ということになるのですから、「筋の通らないデタラメ」の道に導いたロシアの軍部を含む為政者の行動を矯正する上で何の問題解決にもなりません。制裁とは、「法律や規則、また慣習・伝統などの社会的規範に背いた者に対して加えられるこらしめや罰。また、そうした懲罰を加えること」という意味の言葉です。ロシアが背いたという「社会的規範」とは何だったのであり、各国は「罰や懲罰を加える」立場にあると言えるのでしょうか。

日本の岸田首相も、「日本を守ってくれているアメリカ」に習って制裁の手を打っただけで名宰相ぶりっこするのはやめてほしいと思います。こんな時こそ、不戦国家として日本が名乗りをあげて国連と強調して、喧嘩両成敗の道へ導く必要があると思うのですが如何でしょうか。先ず何より NATO(北大西洋条約機構)にウクライナの加入を受け入れない旨表明させること、もっと言えば、ロシア自身に NATO(北大西洋条約機構)参加を勧めることなどは如何でしょうか。もとはと言えば、ソ連が崩壊して米ソ間冷戦体制が終結してから 30 年も経っているのに、NATO の中に“ソ連を中心とする共産圏(東側諸国)に対抗するため”に代わって“ロシアに対抗するため”という“神話にも似た思い込み”が残っていると根本的な問題があるのです。NATO 加盟国の軍事費の合計は、世界全体の 70%以上を占めているとのことですから、プーチン大統領が NATO から受けている圧力感は如何ばかりであったかと思われまふ。ウクライナのゼレンスキー大統領は米議会でビデオ演説を行ない喝采を得ましたが、その中で「アメリカが世界のリーダーになってほしい」という旨の一言をさしはさみました。「アメリカは世界の警察である」というのも“神話に近い思い込み”に属する考え方です。“思い込み”から脱して、アメリカもロシアもウクライナも同等の加盟国とならない限り本格的な問題解決はできないのではないかと考えています。